

第二回 平成二十六(二〇一四)年四月十九日

「夙川と大手前大学」―その創設と関係する人々の物語―

川口 宏海 (かわぐち・ひろしゆみ)

大手前大学が夙川の地に開設されたのは、昭和四十一(一九六六)年です。母体である学校法人大手前学園は、大阪の大手前の地が発祥です。なぜ、大阪ではなく、夙川に大学が誕生したのか。ここでは、大手前大学が開設された由来や、これに関係する人々について、地域や人々の縁を通して紹介していきたいと思えます。

「夙川」・「西宮」の地について

夙川は、兵庫県西宮市の南西に位置し、六甲山麓のごろごろ岳に源を発し、苦楽園、甲陽園などを南流して大阪湾にそそぐ、約六・九kmの川です。下流は、天井川となり、現在は桜並木が美しく、毎年桜見物でにぎわいます。この川の界隈を夙川と称します。



大手前大学は、夙川の中流域の右岸に位置します。ここは、「森貝」村の一部に属します。次の地図には、明治七（一八七四）年に敷設された旧国鉄路線が記入されています。西宮周辺には、農地が広がっていました。

「西宮」の地は、古くは「務古」、「武庫」といいました。『日本書紀』神功皇后摂政元年条には「務古水門」（むこのみかど）と記されています。皇后が新羅遠征の帰途、忍熊王（おしのまの）らの謀反にあつた際、天照大神のお告げがあり、天照大神を山背根子（やましろのねこ）の娘、葉山媛（はやまのめ）に広田の地にまつらせました。これが広田神社の縁起談です。また、この時、同時に神戸市にあります生田、長田神社も鎮座させたと記されています。

広田神社は、平安時代後期には「西宮」と呼ばれていました。藤原頼長『台記』康治元（一一四二）年正月十九日条。広田神社は大阪市の住吉神社と深い関係があり、東に位置する住吉大社に対して西に位置するため、「西宮」と呼ばれるようになったのではないかと、との説があります。

西宮戎神社の成立

鎌倉時代の延慶二（一二三〇）九の年の広田社神官供僧等言上状（『温古雑帳』）には、「西宮最中」の南宮敷地内に「市庭」があり、津料（税）を徴収していたとあります。南宮は、広田神社の別宮であつたと考えられ、周辺には海産物を納めるための「海浜供御人」がいたとあります（同前状）。その後、南宮の境内にあつた一小社「戎三郎殿（戎社）」が「市庭」商人から商売の神としてあがめられるようになり、西宮

阿波屋の登場

江戸時代初期の西宮には、筏屋・檜物屋・畳屋・桶屋・紺屋・鍛冶屋・油屋・淡路屋などの名がみえ、多種多様な商人がいました（『如意寺過去帳』）。

大手前大学の福井要理事長のご先祖は、宮前町に製造所を持つ「阿波屋」という名前の味噌屋でした。言い伝えでは、宝暦元（一七五一）年の創業であるとされています。「阿波屋」もこのような商人の一人として、西宮で味噌作りを始め、成功していったと考えられます。

守具村と福井家の土地取得

現在大手前大学がある場所は、江戸時代には「守（森）具村」と呼ばれていました。

ここは、天保九（一八三八）年「西宮町石高町数等書上」（『西宮市史』）に西宮の枝郷としてみえます。幕末までに西宮町から独立したと考えられます。

福井芳松（治兵衛、俳号艸公）は、西宮の久保町に屋敷を構え、宮前町の阿波屋味噌製造所を六千坪に及ぶ大規模な製造所に拡張をして、日本国内はもちろん、海外にまで販路を広げていました。

大正九（一九二〇）年に森具村字池ノ下と呼ばれていた現在の大手前大学の校地を取得し、妻政江（俳号小萩）との新婚生活のための別荘を建てました。



「阿波屋」の看板



福井 治兵衛

大手前大学校地の現在の地名は「御茶家所町」ですが、これは、昭和十三（一九三八）年からです。名の由来は、西宮神社と広田神社の神幸の休み所である、御茶屋所と称する小社による、とされています。〈角川日本地名大辞典『兵庫県』昭和六十三（一九八八）年〉

また、西側にあるアートセンターは郷免町に属しますが、これは芦屋郷の直轄地で、給費に充てられたため、税を免じられたことに由来するといわれています。（前掲書）

福井治兵衛（卿公）をめぐる人々

福井治兵衛は、実業家で、西宮市議会議員（昭和四―十二（一九二九―三七）年）にもなりましたが、文化人でもあり、特に俳句を得意としました。

『海松 (Mitsun)』(昭和四―六（一九二九―三一）年、5号まで)は、治兵衛が刊行した文化誌です。当時の交流のあった文化人が執筆しています。また俳人松瀬清々や画家黒田重太郎とも交流し、青々が詠んだ句「風呂吹きや 鯉の頭に味噌とろり」の句碑が、大手前大学構内に建てられています。

黒田重太郎筆「閑庭惜春」は、福井治兵衛の家族を描いたものです。松瀬清々（一八六八―一九三七）は、大阪市生まれで、明治二十八（一九九五）年に第一銀行に入行し『ホトトギス』などに投稿しました。明治三十二（一九九九）年高浜虚子に伴われ、正岡子規を見舞ったこともあります。『ホトトギス』編集にも関わりました。のち大阪朝日新聞社に入社し、『宝船』を創刊し、編集主幹を務めました。

黒田重太郎（一八八七―一九七〇）は、大阪市生まれで、はじめ浅井忠に師事、大正十（一九二二）年に再度渡仏した際には、アンドレ・ロートに師事してキュービズムを学びました。大正十三（一九二四）年には大阪に信



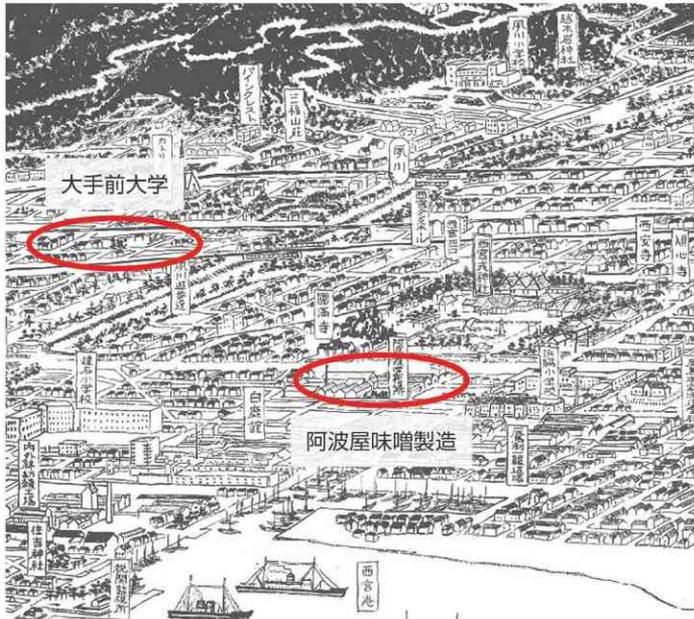
松瀬清々句碑（本学所蔵）

濃橋洋画研究所を設立。大正十四（一九二五）年から一時期広田神社前に居住していました。昭和四十四（一九六九）年日本芸術院恩賜賞を受賞しました。

西宮学園の創設

第二次世界大戦の空襲で、阿波屋の味噌製造所蔵は壊滅し、再建を断念せざるを得ませんでした。昭和二十四（一九四九）年福井治兵衛は、日本初空襲を行った米軍ドゥリットル爆撃機隊員で捕虜第一号であった牧師ジャコブ・デシエーザ師の寄寓を機に、邸宅の洋館で各種学校「ピュア・ソサイエティ」を開設します。この年、福井治兵衛の息子福井律と藤井健造の娘藤井秀加（三奈子）が結ばれます。

翌年これを準学校法人「西宮学園」とし、昭



『西宮鳥瞰図』吉田初三郎図（1936年）を吉井貞俊氏写す（1985年）／部分

和三十五（一九六〇）年まで英語科・社会公民科を開設して、教会の日曜学校の他、英語・タイプ・速記・服飾・バレエなどを教えました。福井秀加も、ここで教鞭をとりました。

藤井健造と大手前学園の成立

大手前学園を創設したのは、初代理事長藤井健造でした。

大阪城内の第十五方面軍・中部軍管区司令部で陸軍大尉として終戦を迎えた藤井健造は、大阪城に近い京橋前之町の旧陸軍将校クラブ偕行社跡地に軍政部の許可を得て女子教育の志を掲げて学び舎「大手前ビジネスカレッジ」を昭和二十一年（一九四六）年四月に設立しました。



初代理事長・学院長
藤井 健造

翌二十二年各種学校「大手前文化学院」と改称し、洋裁のほか、マリー・テレーズ先生のフランス語、英文タイプ、英会話など先進的な教科を教えました。昭和二十四（一九四九）年には、大阪市から大手前之町の一〇〇坪ほどの土地を払下げてもらい、移転します。

大手前女子学園と短期大学の誕生

昭和二十六（一九五二）年学校法人大手前女子学園が設立され、「大手前女子短期大学」が誕生します。昭和三十（一九五五）年には、栄養士養成施設の指定を受け文化学院栄養部ができました。これが現在の栄養学院専門学校のルーツとなります。

昭和三十五（一九六〇）年福井治兵衛は西宮学園を解散し、大手前女子学園に寄贈しました。そして、この地を大手前女子短期大学西宮分校とし、翌年ここに短期大学の寄宿舎「松荘寮」ができました。

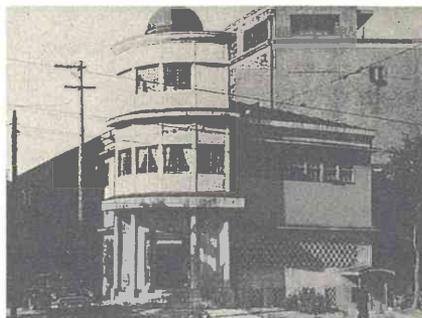
大手前大学の創設

昭和三十九（一九六四）年から、四年制女子大学設立に向けて準備が進められました。当初は、短期大学とのつながりを考え、「家政学部」が計画されていました。しかし、大学設置審議会では、設備が不十分という理由で認められませんでした。

ところがその時、審査委員がお茶を出していた藤井健造の娘福井秀



文化学院での授業風景
(英文タイプライター)



大手前之町に新設された文化学院の校舎



福井治兵衛の夙川の自宅敷地の提供を受け、大手前短期大学の寮が建てられた



旧本館校舎



開学式 三笠宮殿下植樹

加（のち第二代理事長）に「あなたのご専攻は何ですか」と尋ねました。「英文学を学んでおります。特に中世の英文学ジェフリー・チョーサーの作品に興味があります」と答えたのを聞き、審査委員は「こんな素晴らしい後継ぎがおられるのだから、文学部をお考えになったらどうですか」と助言しました。これをきっかけとして、文学部の設置に変更し、新学長に京都大学から国史学の大家中村直勝博士をお迎えし、哲学科、英米文学科を設置することになりました。

昭和四十一（一九六六）年四月苦難を乗り越えて、大手前女子大学は開学し、翌年十一月六日、三笠宮崇仁殿下、金井元彦兵庫県知事、辰馬龍雄西宮市長らをご来賓として、華々しく開学式が執り行われました。

その後の発展

その後、大手前女子大学は、昭和四十四（一九六九）年に史学科を設置するとともに、英文科を英米文学科と改称します。昭和五十（一九七五）年には哲学科を美学・美術史学科に改称します。

平成三（一九九一）年には、大手前女子学園創設者・初代理事長藤井健造の跡を継ぎ、福井秀加が第二代理事長に就任し、翌年には日本文化学科が設置され、著名な建築家安藤忠雄が設計したアートセンターが竣工しました。

しかし、平成七（一九九五）年の阪神・淡路大震災に見舞われ、大学本館が倒壊してしまいます。この時には在学生・教職員一丸となり、復興祭「負けるな夙川 大手前もがんばる」を開催し、復興を誓い合いました。そして、翌平成八（一九九六）年には、新本館校舎を竣工させ、大学院文学研究科を設置するとともに、大手前女子学園創立五十周年・大手前女子大学創立三十周年を祝いました。

平成十二（二〇〇〇）年折からの少子化に対応し、大手前女子学園も男女共学化に踏み切ります。大手前女子大学も大手前大学と改称し、新たな一步を踏み出しました。同時に夙川キャンパスの文学部を

人文科学部と改称するとともに、伊丹キャンパスに社会文化学部を設置しました。このとき、新一年生として入学した男子学生は、パイオニア精神にあふれた学生が多かったように思います。一方、受け入れた先輩女子学生は、少なからぬカルチャーショックを感じたようでした。

平成十六（二〇〇四）年に英語文化学科・日本文化学科を交流文化学科とします。平成十七（二〇〇五）年には、福井有が第三代理事長に就任し、人文科学部美術学科をメディア・芸術学科に改称して学園創立六十周年・大学創立四十周年を祝いました。

平成十九（二〇〇七）年大学は、リベラルアーツ型教育を柱とした総合文化学部、メディア・芸術学部、現代社会学部の三学部体制に生まれ変わるとともに、新図書館メディア・ライブラリーCELLが竣工しました。CELLは斬新な設備を備え、第二十五回日本図書館協会建築賞（二〇〇九年）など、各種の賞に輝きました。

平成二十一（二〇一〇）年には、現代社会学部に通信教育課程を開設し、建学の精神「STUDY FOR LIFE」（生涯にわたる、人生のための学び）を推し進めています。これからも大手前大学は、時代の要請に応じて発展していくことと思います。



震災で被災した旧本館 平成7（1995）年



復興した新本館 平成8（1996）年